

はじめに

このところ発達障害に関する書籍が数多く出版されています。書店に行けば、医学、教育、心理学のみならず、一般書のコーナーにも所狭しと並んでいます。

多くの書籍がある中で、本書が他書とは異なるどのような内容を読者に伝えられるのか？ そう問われたとしたら、私は次の二点を挙げたいと思います。

*

一つ、はじめて発達障害児者の支援に取り組む人がいなく「発達障害って何だろう？」「知的障害とはちがうのかしら？」「どのような種類の障害があるのだろうか？」「支援をどう工夫すればよいのだろうか？」などの疑問に、できるだけわかりやすく説明するよう心がけました。また、活字を読むのが少し苦手と感じている人にも、わかりやすいマンガをたくさん掲載して、手に取りやすく、また興味深く学べるよう工夫しました。

一方、発達障害児者への支援はもうベテランで、知識は十分という読者にも、「この問題にはこういうとらえ方もあるのか」「著者のこの指摘は自分とはちがうぞ」「こ

の支援の視点は、これでいいのだろうか」などと、知識の整理だけに留まらず、いくつかの論点を共感的に、あるいは批判的に読んでもらえるよう工夫したつもりです。

*

二つ、本文中の文言としては直接はあまり使っていませんが、発達保障の視点を大切にしつつ、発達障害児者への配慮や支援を記述しようと努めたことです。

発達保障とは何かと問われれば、これはこれで論議しなければならぬテーマですが（丸山啓史・河合隆平・品川文雄著『発達保障ってなに？』、全障研出版部、が入門書としては最適です）、私個人がそれについて考えた場合、関係するいくつかのキーワードを思い浮かべます。

発達保障はすべての人の権利であること、生存権そのものであること、発達保障はすべての人の無限の可能性を引き出すこと、発達は歴史的に形成されてきた文化を媒介として集団関係を通して進んでいくこと、発達は量的拡大と質的転換をくり返しながら進んでいくこと、発達の原動力は「やってみよう」というねがいと「できない」ことの間にある葛藤（矛盾）にあること、発達は個人の系、集団の系、社会の系と不可分な関係にあること。

発達保障の観点と関連させながら発達障害児者への支援を考えてみたい方に、ぜひ

本書を手にとつていただければと思います。

*

本書は発達障害の知識・理解に関する内容が主です。その特性や配慮・支援の工夫などを学ぶ重要性は言うまでもありません。ですが、発達障害児者もまた普遍的な発達の道すじを歩んでいること、同じ発達障害があるとしても、一人ひとりとはまったく異なる生活の歴史をもっていることを、本書を読んでいただくにあたって確認しておきたいと思います。

このことは配慮・支援の原則を考えるときにも重要となります。本書に紹介した具体的な手立てがすべての発達障害児者に有効なのかと問われれば、それは当然ちがうでしょう。すべての人に役立つマニュアルは、人と人との間でなされる教育や保育などの営みにおいてはあり得ないものだと思うからです。

発達の道すじの共通性、一人ひとりの多様な生活が紡ぎだす個性、これらを頭に置きながら、発達障害の特性や配慮・支援について学んでいきたいと思えます。

*

さあ、ページをめくってください。「どうして？ 教えて！ 発達障害の理解」の学習のはじまりです。